

軒燈がまばらに灯いてゐる。

門札を見ると静岡縣と云ふ事文け解つた。

右側の往來より少し低く建つてゐる家の前に、溝か小さな流れがあるらしい。

十二三の女の子がかゞんで何か洗つてゐるのか、何にもせず考へてゐるのか俯向いてゐる。

俺は白痴か乞食の娘かと心を惹かれた。

寸時立ち止つて話し掛け様かと思つた。

近所隣りまだ起きてる家は一軒もないのだ。

けれども娘が返事をしなかつたか何かで、俺はドン／＼歩るいた。

聴て一筋町も出外れて、淋しいコンモリと老ひ繁つた所や、高い杉の木の生えてゐるお宮の前

らしい所も通り過ぎた。

五六丁行くと廣い周圍が、麥畑ばかりのやうな所に出た。

俺は全身急に鳥肌になり、慄然と寒氣を感じたので、歩く事を止して、道端に腰を下ろした。

此の道をまつすぐに行けば何處へ行くのか、富士山へでも登るのなら止した方が好いと俺は思